

最優秀賞

世界に「まいのゆかた

愛知県 岡崎市立三島小学校四年 杉田 遥香

夏休みに入っすぐ、わたしはおばあちゃんの家へとまりに行った。おばあちゃんはおさいほうやミンシシが得意で、わたしたちにきんちやくぶくろを作ってくれたり、おばあちゃん家の犬に洋服を作ったりしている。一枚のただの布を、はさみですうっと切って、まちばちでちよっと止めて、ミンシシをカタカタとかけると、あっという間にふくろや服ができあがる。まるで魔法みたいで、わたしはいつもわくわくする。わたしがおさいほうをする時は、チャコペンでしっかり線をひかないとまっすぐぬえないのに、おばあちゃんは線をひかなくても、もようがない布でもちゃんとまっすぐにぬってしまうからふしぎだ。おばあちゃんにどうしてまっすぐぬえるのか聞いてみたら、

「おばあちゃんの頭の中に型紙があるの。こんな風に完成させたいなと思うと、布に線がうき出てく

るんだよ。」

と教えてくれた。ますますおばあちゃんがさいほうのま女みたいでわらえてきた。

おばあちゃんのさいほう部屋のおくのハンガーのところ黄色のトンぼのがらのゆかたがかけてあった。そのゆかたは、わたしのゆかたみたいに大きな花のがらではなかったけれど、トンぼのがらなんてめずらしかったので、はおらせてもらった。

「わあなつかしい。ちよっとたけをちぢめたら着れるね。待ってて。」

といって、おばあちゃんは糸をするすると取って直して、着せてくれた。

「これね、はるちゃんのお母さんがちようどはるちゃんぐらいの年に着てたゆかただよ。」

とおばあちゃんが教えてくれて、わたしはとてもびっくりした。お母さんがわたしくらいの年に着てい

たゆかたを、お母さんの子どものわたしが、今着ているなんて。このゆかたはひよっとしたら三十年間わたしに着てもらえるのを待っていたのかもしれないな。

次の日お母さんがむかえにきてくれた時、

「じゃあん。」

と言って、とんぼがらのゆかたでお母さんの前にとび出したら、お母さんはすごくびっくりして、そしてすごくうれしそうだった。

「なつかしいな。お母さんのものは何でもおばあちゃんの手作りだったよ。発表会のドレスも、ゆかたも全部ね。すてきでしょう。」

「次は大切にはるちゃんが着てね。」
と言いながら、ちよっとお母さんがなしていた。きっとお母さんにとって、おばあちゃんが一生けん命手作りしてくれたこのゆかたは、宝物だったんだろう。おばあちゃんのやさしい気持ちがたくさんつまっているものだから。そう思ったら、ちよっぴり古くさいと思っていたとんぼがらがとてもすてきに思えてきた。

今年の夏祭りは、とんぼがらのゆかたを着て行く。おばあちゃんのやさしい気持ちと、お母さんの

思い出がたくさんつまった、世界に一まいのゆかたが、わたしも大好きだ。

